

Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻教授

林 上 (HAYASHI Noboru)

1975年名古屋大学大学院文学研究科博士課程修了。『中心地理論研究』で文学博士（名古屋大学）取得。日本都市学会賞受賞。名古屋地理学会会長、港湾経済学会中部部会長。専門は都市経済地理学。



## 国際人間学研究科における教育・研究「活性化」の取り組みを振り返る



### 白紙のキャンパスに絵を描く

中部大学大学院国際人間学研究科の研究科長として2011年4月から2018年3月までの7年間、研究科における教育・研究の「活性化」のためにいくつかの取り組みを試みてきた。それは、白紙のキャンパスに向かって絵筆をとり、素描から全体像へとイメージの断片をつないでいくような作業だった。未だ完成には程遠いが、この機会に作業過程を振り返り、完成に向けて役立ちそうなヒントを拾い上げることは無意味ではないであろう。

研究科があるべき本来の目的を端的に言えば、それは院生による研究を教員が指導して論文としてまとめ上げ、彼らや彼女らを社会に無事送り出すことである。その過程において、院生への研究指導のために教員自らが研究に励み、その学問的成果を指導に反映させることは、もとより当然なことであろう。しかしこうした通常教育・研究サイクルのほか、教員・院生の師弟関係や同一専攻内といういわば狭い枠組みを超えた、より広い場での学問的交流があってもよいのではないかと考えた。できるならさらに枠を広げ、研究科と大学という縛りにもとられない知的交流の機会は設けられないだろうか、とも思った。

そこでまず取り組んだのが、教員研究発表会と院生による研究報告会の年2回の開催である（図1）。教員は専門分野の研究内容を専門外の教員も集まる場において発表する。また院生には、他専攻の院生や教員が集

まる研究会において報告することを定例化した。一方、対外的な交流としては、外部の研究者、まちづくり活動家、企業経営者などを招いてシンポジウムや講演会を開催することを提案した。こうしたシンポジウムや講演会は開催することそれ自体に意義があるが、その内容を対外的に発信すれば研究科の社会的意義も高まると考え、「アカデミック広報」と名付けた雑誌 GLOCAL を年2回発行することにした。同じ内容を研究科のホームページに掲載すれば、本研究科の活動をより広く知ってもらうことができ、あわよくば大学院進学者の確保にもつながるのではないか、という思いもあった。

に示すように、A～Dのプログラムが院生の入学から修了までの過程を、通常教育・研究とは別に側面からサポートするかたちになっている。いうまでもなく、これらのプログラムは当初から綿密な計画や構想があって実現されていたものではない。出発点となる大きな前提は、研究科の現状をできるだけ正しく認識し、問題点があればそれを克服するために、何ができるかを考えることであった。理系の大学院のように大掛かりな実験装置や設備があるわけではない。自由にできる予算も限られており、結局は自前に備わるマンパワーをできる範囲で有効に活かし、文系大学院が得意とする活動につなげていくという戦略である。幸い、本研究科に所属するメンバーは数が多く、専門分野も多岐にわたっている。教員研究発表会にしても、シンポジウムの開催にしても、多彩な内容で展開することができた。

教員研究発表会は年間2回の開催で、毎回2名の同僚研究者から専門的内容が傾聴できる貴重な機会である。普段、研究科委員会などで机を並べ顔は知っている間柄であるが、学問的専門が何かをよくは知らない。そのような同僚教員から聴く話は興味深く、刺激的でさえある。教員が学生に教えるときの教育的雰囲気とは違う一種独特な知的雰囲気が漂い、研究を生業とする職業人の知的好奇心を刺激する。教員研究発表会は年2回の開催で少ないように思われるが、回数を重ねることで自然に得られる知的収穫は決して小さくない。耳学問を侮ってはいけない。普段はあまり考えない専門外のことであるがゆ

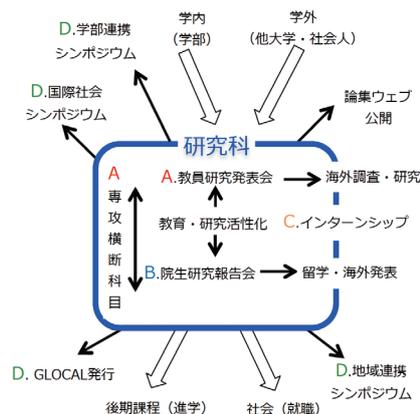


図1: 教育・研究活性化のためのプログラム

### 耳学問を侮るなかれ

以上は7年間の結果として積み上げられた活性化のためのプログラムである。図1

えに印象が深いだけでなく、自分が所属する専攻やそのベースにある学問全体の成り立ちを考え直すきっかけになることもある。食わず嫌いは、長い目で見れば、やはり損なことが多い。

## 成果を GLOCAL に集めて発信

「アカデミック広報」と名付けた雑誌 GLOCAL の名称は、いうまでもなく GLOBAL と LOCAL を合わせてつくった造語である（図 2）。すでにどこかで使われているのを承知で採用したのは、国際関係学部と人文学部の上にある研究科という性格を意識したからである。世界同一市場はすでに存在しており、そこから逃れることはできない。



図2: GLOCAL Vol.1～4の表紙

しかし世界が無数の局地によって成り立っていることも事実であり、LOCAL なくしては GLOBAL もない。GLOBAL に踊らされたり振り回されたりすることなく、LOCAL の奥底に潜む普遍性に注目する。見出された普遍的価値が世界に伝えられ理解されれば、LOCAL は GLOBAL へと昇華する。かつてよくいえばそのようなシナリオであるが、実際には LOCAL の何に注目するか、ここが問題である。そこで注目したのが、大学周辺の旧街道・古戦場や地元自治体・地区の文化・伝統などである。これらをシンポジウムのテーマに掲げ、研究者、郷土史家、まちづくり関係者をパネラーに招いてシンポジウムを開催した（図 3）。毎回、多くの参加者があり、自らのルーツにつながる歴史に関心を寄せる市井の人々がいかに多いか、驚かされた。

## シンポジウムを企画して活気づける

いくら「アカデミック広報」というメディアを器として用意しても、中身がなければ読んでもらえない。当初は 150 部くらい印刷し、外部にも郵送した。しかし同じ内容を研究科のホームページにも掲載するようにしたため、送付辞退の連絡も何件か頂いた。このため郵送部数は若干減らしたが、院生確保につながるかもしれない可能性を考えるとゼロにするわけにはいかない。一方、ウェブ掲載の GLOCAL は閲覧数が年々増加し、雑誌として引用されることもめずらしくなくなった。こうなると発行を継続するしかない。掲載内容を豊かにするため、研究会やシンポジウムにも工夫を凝らす必要が生じてきた。幸い、所属教員の中から国際的なテロや近代国家の成立過程などに関するシンポジウムを提案して実行する事例が現れるようになった。企画・実践者が明日の研究科をリードしていく若手教員であることは、頼もしい限りである。お仕着せのシンポジウムではなく、院生、学生、職員も参加しやすい気楽な雰囲気での開催は新鮮である。教員自らがシンポジウムにふさわしいデザインのポスターを手づくりし、大学のウェブに掲載するというスタイルも定着した。

## 研究好きな院生による自主勉強会

大方の予想に反し国際人間学研究科では、修了後の就職を主な動機に進学してくる学生は多くない。これは理系研究科との違いでもあり、純粋に学問研究をしたいという気持ちが院生の間で強いことは、傍から見ても

よくわかる。そのような院生の勉学意欲は、通常のマンツーマンに近い演習によって満たされるだけでなく、院生による研究報告会、通称「院生の力」によって大いに高められる。他専攻の院生や教員をまえに、自らの言葉で研究内容を紹介し質疑を受けることは、自信増加につながることで定である。社会人院生が同じ研究室の中で机を並べているのも本研究科の特徴のひとつであり、人生の先輩から専門以外のことがらを学ぶことも多い。逆の効果もあり、社会人院生は、ともしれば忘れがちな若い感性を年下の同僚院生から受ける。院生の勉学に関して特筆すべきは、院生自らが企画した研究会（通称「イン活」）が毎月のように開催されていることである。開催場所は全学の教育施設である不言実行館の開放的なフロアやスタディールームであり、他研究科、他学部の学生も自由に参加できる。院生の間で自発的活動が生まれてきたことは、大きな収穫である。

## 活性化のカギは明日への向上心

以上で述べてきたように、本研究科における研究・教育「活性化」のためのプログラムの輪郭はおぼろげながら描けたように思われる。しかし根本的課題はなお残されたままである。基本となるカギは、人間として、また研究者・学徒として、いまより一歩だけ前に進みたいという向上心である。向上心を共有する教員、院生が自らアイデアを持ち寄り、「何かおもしろいこと」をひとつひとつ積み重ねていくことが、この研究科にふさわしい活性化への道ではないだろうか。



図3: シンポジウムのポスター